

黒猫

THE BLACK CAT

エドガー・アラン・ポー Edgar Allan Poe

青空文庫

私がこれから書こうとしているきわめて奇怪な、またきわめて素朴そぼくな物語については、自分はそれを信じてもらえとも思わないし、そう願ひもしない。自分の感覚でさえが自分の経験したことを信じないような場合に、他人に信じてもらおうなどと期待するのは、ほんとに正気の沙汰さたとは言えないと思う。だが、私は正気を失っている訳ではなく、——また決して夢みているでもない。しかしあす私は死ぬべき身だ。で、今日のうちに自分の魂の重荷をおろしておきたいのだ。私の第一の目的は、一連の単なる家庭の出来事を、はつきりと、簡潔に、注釈ぬきで、世の人々に示すことである。それらの出来事は、その結果として、私を恐れさせ——苦しめ——そして破滅させた。だが私はそれをくどくどと説明しようとは思わない。私にはそれはただもう恐怖だけを感じさせた。——多くの人々には恐ろしいというよりも怪奇バロックなものに見えるであろう。今後、あるいは、誰か知者があらわれてきて、私の幻想を単なる平凡なことにしてしまいかもしれぬ。——誰か私などよりももつと冷静な、もつと論理的な、もつとずっと興奮しやすすくない知性人が、私が畏い怖ふをもつて述べる事からのなかに、ごく自然な原因結果の普通の連続以上のものを認めないようにならう。

子供のころから私はおとなしくて情けぶかい性質で知られていた。私の心の優しさは仲間たちにかかわれるくらいにきわだっていた。とりわけ動物が好きで、両親もさまざまな生きものを私の思いどおりに飼ってくれた。私はたいていそれらの生きものを相手にして時を過し、それらに食物をやったり、それらを愛撫あいぶしたりするときほど楽しいことはなかった。この特質は成長するとともにだんだん強くなり、大人になってからは自分の主な楽しみの源泉の一つとなったのであった。忠実な利口な犬をかわいがったことのある人には、そのような愉快さの性質や強さをわざわざ説明する必要はほとんどない。動物の非利己的な自己犠牲的な愛のなかには、単なる人間のさもしい友情や薄っぺらな信義をしばしば嘗なめたことのある人の心をじかに打つなものがある。

私は若いころ結婚したが、幸いなことに妻は私と性の合う気質だった。私が家庭的な生きものを好きなのに気がつくとき、彼女はおりさえあればとても気持のいい種類の生きものを手に入れた。私たちは鳥類や、金魚や、一匹の立派な犬や、兎うさぎや、一匹の小猿こざるや、一匹の猫などを飼った。

この最後のものは非常に大きな美しい動物で、体じゅう黒く、驚くほどに利口だった。この猫の知恵のあることを話すときには、心ではかなり迷信にかぶれていた妻は、黒猫と

いうものがみんな魔女が姿を変えたものだという、あの昔からの世間の言いつたえを、よく口にしたものだ。もつとも、彼女だつていつでもこんなことを本気で考えていたというのではなく、——私がこの事がらを述べるのはただ、ちょうどいまふと思ひ出したからにすぎない。

プルトオ（一）——というのがその猫の名であつた——は私の気に入りであり、遊び仲間であつた。食物をやるのはいつも私だけだつたし、彼は家じゆう私の行くところへどこへでも一緒に来た。往來へまでついて来ないようにするには、かなり骨が折れるくらいであつた。

私と猫との親しみはこんなぐあいにして数年間つづいたが、そのあいだに私の氣質や性格は一般に——酒癖という悪鬼のために——急激に悪いほうへ（白状するのも恥ずかしいが）變つてしまった。私は一日一日と氣むずかしくなり、癩かんしゃく癩かもちになり、他人の感情などちつともかまわなくなつてしまった。妻に対しては乱暴な言葉を使うようになった。しまいには彼女の体に手を振り上げるまでになつた。飼つていた生きものも、もちろん、その私の性質の変化を感じさせられた。私は彼らをかまわなくなつただけではなく、ぎやく虐待たいした。けれども、兎や、猿や、あるいは犬でさえも、なにげなく、または私を慕つて、

そばへやって来ると、遠慮なしにいじめてやったものだったが、プルートオをいじめないでいただくの心づかいはまだあった。しかし私の病気はついついてきて——ああ、アルコールのような恐ろしい病気が他にあるうか！——ついにはプルートオでさえ——いまでは年をとって、したがっていくらか怒りっぽくなっているプルートオでさえ、私の不機嫌ふいきげんのとばっちりをうけるようになった。

ある夜、町のそちこちにある自分の行きつけの酒場の一つからひどく酔っぱらって帰って来ると、その猫がなんだか私の前を避けたような気がした。私は彼をひつとらえた。そのとき彼は私の手荒さにびっくりして、歯で私の手にちよつとした傷をつけた。と、たちまち悪魔のような憤怒ふんぬが私にのりうつた。私は我を忘れてしまった。生来のやさしい魂はすぐに私の体から飛び去ったようであった。そしてジン酒におだてられた悪鬼以上の憎悪うおが体のあらゆる筋肉をぶるぶる震わせた。私はチョッキのポケットからペンナイフを取り出し、それを開き、そのかわいそうな動物の咽喉のどをつかむと、悠々ゆうゆうとその眼窩がんかから片眼ためをえぐり取った。この憎むべき凶行をしるしながら、私は面おもてをあからめ、体がほてり、身ぶるいする。

朝になって理性が戻ってきたとき——一晩眠って前夜の乱行の毒気が消えてしまったと

き——自分の犯した罪にたいしてなけば恐怖の、なけば悔恨の情を感じた。が、それもせいぜい弱い曖昧あいまいな感情で、心まで動かされはしなかった。私はふたたび無節制になって、間もなくその行為のすべての記憶を酒にまぎらしてしまった。

そのうちに猫はいくらかずつ回復してきた。眼のなくなった眼窩はいかにも恐ろしい様子をしてはいたが、もう痛みは少しもないようだった。彼はもとどおりに家のなかを歩きまわっていたけれども、当りまえのことであろうが私が近づくときとひどく恐ろしがって逃げて行くのだった。私は、前にあんなに自分を慕っていた動物がこんなに明らかに自分を嫌うようになったことを、初めは悲しく思うくらいに、昔の心が残っていた。しかしこの感情もやがて癩癩きらくに変つていった。それから、まるで私を最後の取りかえしのつかない破滅に陥らせるためのように、天邪鬼の心持がやってきた。この心持を哲学は少しも認めてはいない。けれども、私は、自分の魂たまが生きているということと同じくらいに、天邪鬼あまのじやくが人間の心の原始的な衝動の一つ——人の性格に命令する、分つことのできない本源的な性能もしくは感情の一つ——であるということを確信している。してはいけないという、ただそれだけの理由で、自分が邪悪な、あるいは愚かな行為をしていることに、人はどんなにかしばしば気づいたことであろう。人は、掟おきてを、単にそれが掟であると知っているだけ

のために、その最善の判断に逆らつてまでも、その掟を破ろうとする永続的な性向を、持つていはいないだろうか？ この天邪鬼の心持がいま言ったように、私の最後の破滅を来たしたのであつた。なんの罪もない動物に対して自分の加えた傷害をなおもつづけさせ、とうとう仕遂げさせるように私をせつついたのは、魂の自らを苦しめようとする——それ自身の本性に暴虐を加えようとする——悪のためにのみ悪をしようとする、この不可解な切望であつたのだ。ある朝、冷然と、私は猫の首に輪索わなわをはめて、一本の木の枝につるした。——眼から涙を流しながら、心に痛切な悔恨を感じながら、つるした。——その猫が私を慕つていたということを知つていればこそ、猫が私を怒らせるようなことはなに一つしなかつたということを感じていればこそ、つるしたのだ。——そうすれば自分は罪を犯すのだ、——自分の不滅の魂をいとも慈悲ぶかく、いとも畏おそるべき神の無限の慈悲の及ばない彼方かなたへ置く——もしそういうことがありうるなら——ほどにも危あやうくするような極悪罪を犯すのだ、ということを知つていればこそ、つるしたのだ。

この残酷な行為をやつた日の晩、私は火事だという叫び声で眠りから覚まされた。私の寝台のカーテンに火がついていた。家全体が燃え上がっていた。妻と、召使と、私自身とは、やつこのことでその火災からのがれた。なにもかも焼けてしまった。私の全財産はな

くなり、それ以来私は絶望に身をまかせてしまった。

この災難とあの凶行とのあいだに因果關係をつけようとするほど、私は心の弱い者ではない。しかし私は事実のつながりを詳しく述べているのであって、——一つの鑲でも不完全にしておきたくないのである。火事のつぎの日、私は焼跡へ行ってみた。壁は、一カ所だけをのぞいて、みんな焼け落ちていた。この一カ所というのは、家の真ん中あたりにある、私の寝台の頭板に向っていた、あまり厚くない仕切壁のところであった。ここの漆喰だけはだいたい火の力に耐えていたが、——この事実を私は最近そこを塗り換えたからだろうと思った。この壁のまわりに真っ黒に人がたかかっていて、多くの人々がその一部分を綿密な熱心な注意をもつて調べているようだった。「妙だな!」「不思議だね?」という言葉や、その他それに似たような文句が、私の好奇心をそそった。近づいてみると、その白い表面に薄肉彫りに彫ったかのように、巨大な猫の姿が見えた。その痕はまったく驚くほど正確にあらわれていた。その動物の首のまわりには縄があった。

最初この妖怪——というのは私にはそれ以外のものとは思えなかったからだ——を見たとき、私の驚愕と恐怖とは非常なものだった。しかしあれこれと考えてみてやると気が安まった。猫が家につづいている庭につるしてあったことを私は思い出した。火事

の警報が伝わると、この庭はすぐに大勢の人でいっぱいになり、——そのなかの誰かが猫を木から切りはなして、開いていた窓から私の部屋のなかへ投げこんだものにちがいない。これはきつと私の寝ているのを起すためにやったものだろう。そこへ他の壁が落ちかかつて、私の残虐の犠牲者を、その塗りたての漆喰の壁のなかへ押しつけ、そうして、その漆喰の石灰と、火炎と、死骸しがいから出たアンモニアとで、自分の見たような像ができあがったのだ。

いま述べた驚くべき事実を、自分の良心にたいしてはぜんぜんできなかつたとしても、理性にたいしてはこんなにあやすく説明したのであるが、それでも、それが私の想像に深い印象を与えたことにはなかつた。幾月ものあいだ私はその猫の幻像を払いのけることができなかつた。そしてそのあいだ、悔恨に似ているがそうではないある漠然ぼくぜんとした感情が、私の心のなかへ戻ってきた。私は猫のいなくなったことを悔むようにさえなり、そのころ行きつけの悪所あくしょでその代りになる同じ種類の、またいくらか似たような毛並のものがないかと自分のまわりを捜すようにもなつた。

ある夜、ごくたちの悪い酒場に、なかば茫然ぼうぜんとして腰かけていると、その部屋の主な家具をになつているジン酒かラム酒の大樽おおたるの上に、なんだか黒い物がじつとしているの

に、とつぜん注意をひかれた。私はそれまで数分間その大樽のてっぺんのところをじつと見ていたので、いま私を驚かせたことは、自分がもっと早くその物に気がつかなかつたという事実なのであつた。私は近づいて行つて、それに手を触れてみた。それは一匹の黒猫——非常に大きな猫——で、プルートオくらいの大きさは十分あり、一つの点をのぞいて、あらゆる点で彼にとてもよく似ていた。プルートオは体のどこにも白い毛が一本もなかつたが、この猫は、胸のところがほとんど一面に、ぼんやりした形ではあるが、大きな、白い斑点はんてんで蔽おほわれているのだ。

私がさわると、その猫はすぐに立ち上がり、さかんにごろごろ咽喉を鳴らし、私の手にとりつけ、私が目をつけてやったのを喜んでいようだった。これこそ私の探している猫だった。私はすぐにその主人にそれを買いたいと言ひ出した。が主人はその猫を自分のものだとは言わず、——ちつとも知らないし——いままでに見たこともないと言ひ出した。

私は愛撫をつづけていたが、家へ帰りかけようとする、その動物はついて来たいような様子を見せた。で、ついて来るままにさせ、歩いて行く途中でおりおりかがんで軽く手で叩たたいてやった。家へ着くと、すぐに居ついてしまい、すぐ妻の非常なお気に入りになつ

た。

私はというと、間もなくその猫に対する嫌悪の情が心のなかに湧き起るのに気がついた。これは自分の予想していたこととは正反対であった。しかし——どうしてだか、またなぜだかは知らないが——猫がはつきり私を好いていることが私をかえって厭がらせ、うるさがらせた。だんだんに、この厭でうるさいという感情が嵩じてはげしい憎しみになっていった。私はその動物を避けた。ある慚愧の念と、以前の残酷な行為の記憶とが、私にそれを肉体的に虐待しないようにさせたのだ。数週の間、私は打つとか、その他手荒なことはしなかった。がしだいしだいに——ごくゆっくりと——言いようのない嫌悪の情をもってその猫を見るようになり、悪疫の息吹から逃げるように、その忌むべき存在から無言のままに逃げ出すようになった。

疑いもなく、その動物に対する私の憎しみを増したのは、それを家へ連れてきた翌朝、それにもプルートオのように片眼がないということを見つけたことであつた。けれども、この事がらのためにそれはますます妻にかわいがられるだけであつた。妻は、以前は私のりっぱな特徴であり、また多くのもっとも単純な、もっとも純粋な快樂の源であつたあの慈悲ぶかい気持を、前にも言ったように、多分に持っていたのだ。

しかし、私がこの猫を嫌えば嫌うほど、猫のほうはいよいよ私を好くようになってくるようだった。私のあとをつけまわり、そのしつこさは読者に理解してもらうのが困難なくらいであった。私が腰かけているときにはいつでも、椅子いすの下にうずくまったり、あるいは膝ひざの上へ上がって、しきりにどこへでもいまいまくじやれついたりした。立ち上がった歩こうとすると、両足のあいだへ入って、私を倒しそうにしたり、あるいはその長い鋭い爪つめを私の着物にひっかけて、胸のところまでよじ登ったりする。そんなときには、殴り殺してしまいたかったけれども、そうすることを差し控えたのは、いくらか自分の以前の罪悪を思い出すためであったが、主としては——あつさり白状してしまえば——その動物がほんとうに怖かったためであった。

この怖さは肉体的災害の怖さとは少し違っていた、——が、それでもそのほかにそれをなんと説明してよいか私にはわからない。私は告白するのが恥ずかしいくらいだが——そうだ、この重罪人の監房のなかにあつてさえも、告白するのが恥ずかしいくらいだが——その動物が私の心に起させた恐怖の念は、実にくだらない一つの妄想もうそうのために強められていたのであった。その猫と前に殺した猫との唯一ゆいいつの眼に見える違いといえ、さつき話したあの白い毛の斑点なのだが、妻はその斑点のことで何度か私に注意していた。この

斑点は、大きくはあつたが、もとはたいへんぼんやりした形であつたということ、読者は記憶せられるであろう。ところが、だんだんに——ほとんど眼につかないほどにゆつくりと、そして、長いあいだ私の理性はそれを気の迷いだとして否定しようと思つていたのだが——それが、とうとう、まったくきつぱりした輪郭となつた。それはいまや私が名を言うも身ぶるいするような物の格好になつた。——そして、とりわけこのために、私はその怪物を嫌い、恐れ、できるなら思いきつてやつつけてしまいたいと思つたのであるが、——それはいまや、恐ろしい——もの凄^{すし}い物の——絞首台の——形になつたのだ！——

おお、恐怖と罪惡との——苦悶^{くもん}と死との痛ましい恐ろしい刑具の形になつたのだ！

そしていまこそ私は実に単なる人間の惨^{みじ}めさ以上に惨^{みじ}めであつた。一匹の畜生が——その仲間の奴^{やつ}を私は傲^{ごうぜん}然と殺してやつたのだ——一匹の畜生が私に——いと高き神の像^{かたち}にかたど象^{かたど}つて造られた人間である（2）私に——かくも多くの堪^{かた}えがたい苦痛を与えるとは！

ああ！ 昼も夜も私はもう安息の恩恵というものを知らなくなつた！ 昼間はかの動物がちよつとも私を一人にしておかなかつた。夜には、私は言いようもなく恐ろしい夢から毎時間ぎよつとして目覚めると、そいつの熱い息が自分の顔にかかり、そのどっしりした重さが——私には払い落す力のない悪魔の化身が——いつもいつも私の心臓の上に圧^おしかか

っているのだった！

こういった呵責かしゃくに押しつけられて、私のうちに少しばかり残っていた善も敗北してしまった。邪悪な考えが私の唯一の友となった、——もつとも暗黒な、もつとも邪悪な考えが。私のいつもの気むずかしい気質はますますつのが、あらゆる物やあらゆる人を憎むようになった。そして、いまでは幾度もとつぜんに起るおさえられぬ激怒の発作に盲目的に身をまかせたのだが、なんの苦情も言わない私の妻は、ああ！ それを誰よりもいつもひどく受けながら、辛抱づよく我慢したのだった。

ある日、妻はなにかの家の用事で、貧乏のために私たちが仕方なく住んでいた古い穴蔵のなかへ、私と一緒に降りてきた。猫もその急な階段を私のあとへついて降りてきたが、もう少しのこと私を真つ逆さまに突き落そうとしたので、私はかっと激怒した。怒りのあまり、これまで自分の手を止めていたあの子供らしい怖さも忘れて、斧おのを振り上げ、その動物をめがけて一撃に打ち下ろそうとした。それを自分の思ったとおりに打ち下ろしたなら、もちろん、猫は即座に死んでしまったろう。が、その一撃は妻の手でさえぎられた。この邪魔立てに悪鬼以上の憤怒に駆られて、私は妻につかまれている腕をひき放し、斧を彼女の脳天に打ちこんだ。彼女は呻うめき声もたてずに、その場で倒れて死んでしまった。

この恐ろしい殺人をやってしまったと、私はすぐに、きわめて慎重に、死体を隠す仕事に取りかかった。昼でも夜でも、近所の人々の目にとまる恐れなしには、それを家から運び去ることができないということは、私にはわかつていた。いろいろの計画が心に浮んだ。

あるときは死骸を細かく切つて火で焼いてしまおうと考えた。またあるときには穴蔵の床にそれを埋める穴を掘ろうと決心した。さらにまた、庭の井戸のなかへ投げこもうかとも

——商品のように箱のなかへ入れて普通やるように荷造りして、運搬人に家から持ち出させようかとも、考えてみた。最後に、これらのどれよりもずつといいと思われる工夫を考えついた。中世紀の僧そうりよ侶たちが彼らの犠牲者を壁に塗りこんだと伝えられているように——それを穴蔵の壁に塗りこむことに決めたのだ。

そういつた目的にはその穴蔵はたいへん適していた。その壁はぞんざいでできていたし、近ごろ粗い漆喰を一面に塗られたばかりで、空気が湿っているためにその漆喰が固まっていなかった。その上に、一方の壁には、穴蔵の他のところと同じようにしてある見せかけだけの煙突か暖炉のためにできた、突き出た一カ所があった。ここの煉瓦れんがを取りのけて、死骸を押しこみ、誰の目にもなにか怪しいことの見つからないように、前のおりにすつかり壁を塗り潰すつぶことは、造作なくできるにちがいない、と私は思った。

そしてこの予想はずれなかった。鉄かねてこ槌こを使って私はたやすく煉瓦を動かし、内側の壁に死体を注意深く寄せかけると、その位置に支えておきながら、大した苦もなく全体をもとのとおりに積み直した。できるかぎりの用心をして膠モルタル泥と、砂と、毛髪とを手に入れると、前のと区別のつけられない漆喰をこしらえ、それで新しい煉瓦細工の上をとても念入りに塗った。仕上げてしまうと、万事がうまくいったのに満足した。壁には手を加えたような様子が少しも見えなかった。床の上の屑くずはごく注意して拾い上げた。私は得意になつてあたりを見まわして、こう独ひとりごと言を言った。——「さあ、これで少なくとも今度だけは己おれの骨折りも無駄むだじゃなかったぞ」

次に私のやることは、かくまでの不幸の原因であつたあの獣を捜すことであつた。とうとう私はそれを殺してやろうと堅く決心していたからである。そのときそいつに出会うことができたなら、そいつの命はないに決つていた。が、そのずるい動物は私のさっきの怒りのはげしさにびつくりしたらしく、私がいまの気分で見るところへは姿を見せるのを控えていたようであつた。その厭いとでたまらない生きものがいなくなつたために私の胸に生じた、深い、この上なく幸福な、安堵あんどの感じは、記述することも、想像することもできないくらいである。猫はその夜じゆう姿をあらわさなかつた。——で、そのために、あの猫を

家へ連れてきて以来、少なくとも一晩だけは、私はぐっすりと安らかに眠った。そうだ、魂に人殺しの重荷を負いながらも眠ったのだ！

二日目も過ぎ三日目も過ぎたが、それでもまだ私の呵責者は出てこなかった。もう一度私は自由な人間として呼吸した。あの怪物は永久にこの屋内から逃げ去ってしまったのだ！ 私はもうあいつを見ることはないのだ！ 私の幸福はこの上もなかった！ 自分の凶行の罪はほとんど私を不安にさせなかった。二、三の訊問しんもんは受けたが、それには造作なく答えた。家宅搜索さえ一度行われた、——が無論なにも発見されるはずがなかった。私は自分の未来の幸運を確実だと思った。

殺人をしてから四日目に、まったく思いがけなく、一隊の警官が家へやって来て、ふたたび屋内を嚴重に調べにかかった。けれども、自分の隠いんとく匿の場所はわかるはずがないと思つて、私はちつともどぎまぎしなかった。警官は私に彼らの搜索について来いと命じた。彼らはすみずみまでも残るくまなく搜した。とうとう、三度目か四度目に穴蔵へ降りて行った。私は体の筋一つ動かさなかった。私の心臓は罪もなく眠っている人の心臓のように穏やかに鼓動していた。私は穴蔵を端から端へと歩いた。腕を胸の上で組み、あちこち悠々ゆうゆうと歩きまわった。警官はすっかり満足して、引き揚げようとした。私の心の歓喜は

抑えきれないくらい強かった。私は、凱歌がいかのつもりでたった一言でも言つてやり、また自分の潔白を彼らに確かな上にも確かにしてやりたくてたまらなかつた。

「皆さん」と、とうとう私は、一行が階投をのぼりかけたときに、言つた。「お疑いが晴れたことをわたしは嬉うれしく思います。皆さん方のご健康を祈り、それから少し礼儀を重んぜられんことを望みます。ときに、皆さん、これは——これはなかなかよくできている家ですぜ」「なにかをすらすら言いたいはげしい欲望を感じて、私は自分の口に行つていふことがほとんどわからなかつた」——「すてきによくできている家だと言つていいでしょうな。この壁は——お帰りですか？ 皆さん——この壁はがんじょうにこしらえてありますよ」そう言つて、ただ気違いじみた空威張りから、手にした杖つえで、ちようど愛妻の死骸が内側に立つている部分の煉瓦細工を、強くたたいた。

だが、神よ、魔王の牙きばより私を護まもりまた救いたまえ！ 私の打つた音の反響が鎮しずまるか鎮まらぬかに、その墓のなかから一つの声が私に答えたのであつた！——初めは、子供の啜すすり泣きのように、なにかで包まれたような、きれぎれな叫び声であつたが、それから急に高まつて、まったく異様な、人間のものではない、一つの長い、高い、連続した金切声となり、——地獄に墜おちてもだえ苦しむ者と、地獄に墜おとして喜ぶ悪魔との咽喉のどから一緒

になつて、ただ地獄からだけ聞えてくるものと思われるような、なかば恐怖の、なかば勝利の、号泣——慟哭どうこくするような悲鳴——となつた。

私自身の気持は語るも愚かである。気が遠くなつて、私は反対の側の壁へとよろめいた。一瞬間、階段の上にはいた一行は、極度の恐怖と畏懼いぐのため、じつと立ち止つた。次の瞬間には、幾本かの逞たくましい腕が壁をせつせとくずしていた。壁はそっくり落ちた。もうひどく腐爛ふらんして血魂が固まりついている死骸が、そこにいた人々の眼前にすつくと立つた。その頭の上に、赤い口を大きくあけ、爛々たる片眼かためを光らせて、あのいまわしい獣すわが坐つていた。そいつの奸策かんさくが私をおびきこんで人殺しをさせ、そいつのたてた声が私を絞刑吏に引渡したのだ。その怪物を私はその墓のなかへ塗りこめておいたのだつた！

(1) Pluto —— ローマ神話の下界の王。冥府めいふの王の名。

(2) 旧約全書創世記第一章第二十六—二十七節、「神かたじしい給たまひけるは我儕われらに象かたじりて我儕われらの像かたちのごとく我儕われら人を造り……と、神かたじその像かたちの如ごとくに人ひとを創造つくりたまえり。即すなわち神かたじの像かたちの如ごとくに之これを造り云々うんぬん」

青空文庫情報

底本：「黒猫・黄金虫」新潮文庫、新潮社

1951（昭和26）年8月15日発行

1995（平成7）年10月15日89刷改版

1997（平成9）年第93刷

入力：大野晋

校正：宮崎直彦

1999年2月4日公開

2014年2月24日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

黒猫

THE BLACK CAT

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫
著者 エドガー・アラン・ポー Edgar Allan Poe
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks
青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>